

【原の《技術者一口メモ》〔05〕】

紀州が生んだ「知の巨人・南方熊楠」

2026 年の 6 月 29 日に㈱コイシと九州工業大学とが連携する勉強会において、久々に南方熊楠についてお話しする機会をいただいた。そこで、今回の「原の《技術者一口メモ》〔05〕」は、南方熊楠の遍歴、南方曼荼羅、昭和天皇の御製碑それと対となる神島に熊楠が自ら建てた歌碑の話題他に加えて、南方が提唱した「事不思議、物不思議、心不思議、理不思議」について、最近の量子力学の知見を先取りしたかのように思える熊楠の鋭い洞察の一端を紹介するものである。

【Ⅰ】南方熊楠の遍歴

南方熊楠(1867～1941)は、慶応 3 (1867) 年 4 月 13 日、紀州和歌山城下町の橋丁(現・和歌山市)に生まれる。八、九才の頃から近所の家に本を求めて通い、毎日数ページ分を暗記し家に帰って筆写する。わが国最初の百科事典ともいわれる全漢文の『和漢三才図絵』の百五巻や明(中国)の植物学大事典『本草綱目』五十二巻などを数年がかりで筆写して、膨大な写本図書館をつくりあげている。

これを見て父弥兵衛は、この子だけは学問をさせようと明治 12 (1879) 年に和歌山中学校(現・和歌山県立桐蔭高校)の創立とともに同校への入学を許可、卒業後は上京し神田の共立学校(現・開成高校)に入学し、ここでは高橋是清より英語を学んでいる。翌年の明治 17 (1884) 年 9 月に大学予備門(東京帝国大学の前身)に入学する。同期の夏目漱石、正岡子規、秋山真之等と学ぶが、平凡な秀才教育に反抗、「人生は短いのだ、我が身の役に立たぬものを習うて何が学問か」「僕も是から勉強を積んで、洋行をすました其後は降るあめりかを跡に見て、晴る日本に立帰り、一大事業をなした後、天下の男といわれたい」の言葉を残し渡米を決意。熊楠十九歳の春であった。1886 年 12 月 22 日、横浜港を出帆、翌年 1 月 7 日にサンフランシスコに着く。(写真-1、明治 24 年撮影) だが、アメリカの学校に入っただものの、「このような学校へ三年や四年通ってみたところで、所詮無益なことなり」と言い放ち、窮迫極めた生活をしつつミシガン、フロリダ半島を経てキューバへ放浪を重ねながら地衣類、菌類の採集を続けていく。その後、ベネズエラを訪れた後ニューヨークから「わが思うこと涯(きわま)りなく、命に涯(かぎり)りあり、見たき書物は多く、手許に金は薄し」と世界の文化中心地ロンドンに向かったのである。

幼少から記憶力抜群。英、仏、独、スペイン、ラテン、ギリシャなど 18 ヶ国語に通じ、生物、民族、文学、宗教、天文学など、どの分野をとっても超一級の学識であり、後年“博識無限、百科全書に足が生えて歩き出したような男”と言われた熊楠である。



写真-1 若き日の熊楠

【Ⅱ】南方曼荼羅

① 土宜法竜宛書簡に見る「南方曼陀羅」

図-1 に示したいわゆる「南方曼陀羅」の図は、後の真言宗・高野山管長となる土宜法竜

宛の、明治 36 年 7 月 18 日付書簡の中で描かれたものである。

熊楠はたびたび「小生の曼陀羅」と称する科学と大乘仏教を接合する世界認識の方法を、土宜に向けた書簡において論じていたようである。この図は、そうした試みの一つとして熊楠が描いたもので、インド哲学や仏教学を中心とする東洋思想研究の権威の中村元博士が「南方マンダラ」と呼び、のち鶴見和子氏が熊楠思想の根源をなすモデルとして紹介し広く知られるに至ったものである。

以下に、鶴見和子氏自身の言を紹介する。

《曼陀羅とは、「宇宙の真実の姿を、自己の哲学に従って立体または平面によって表現したもの」である。

真言曼陀羅とは、真言の教主である

「大日如来を中心として、諸仏、菩薩、明王、天を図式的にしめしたものである」。この真言曼陀羅にヒントをえて、南方は曼陀羅を森羅万象の相関関係を図で示したもの、と解した。

土宜法竜宛書簡で森羅万象相関関係図を、以下に示すとき絵図に描いた。この南方の絵図を、中村元博士にお目につけたら、「これは、南方曼陀羅ですね」と即座にずばりいわれた。そこで、わたしも、中村博士にならって、これを「南方曼陀羅」と呼ぶこととする。曼陀羅とは、今日の科学用語でいえばモデルである。南方曼陀羅は南方の世界観を絵図として示したものなのである。

② 熊楠が語る「五つの不思議」

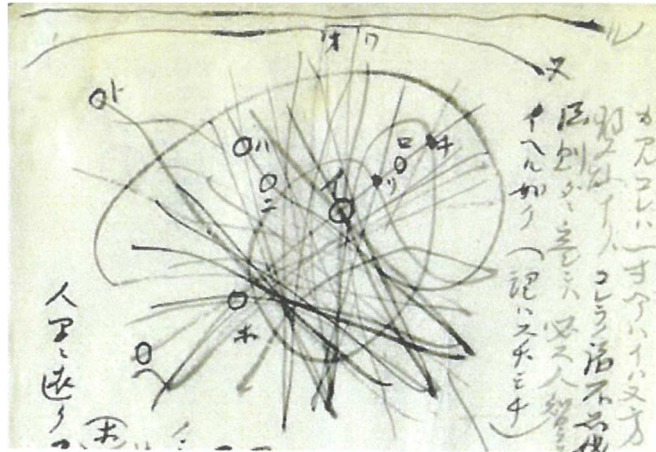
以上の鶴見和子氏の曼陀羅の説明に一部該当する熊楠自身の言を、明治 36 年 7 月 18 日付土宜法竜宛書簡より抜粋紹介する。

「ここに一言す。不思議ということあり。事不思議あり。物不思議あり。心不思議あり。理不思議あり。大日如来の大不思議あり。予は、今日の科学は物不思議をばあらかた片付け、その順序だけざっと立てならべ得たることと思う。(人は理由とか原理とかいう。しかし実際は原理にあらず。不思議解剖して現象団とせしまでなり。このこと前書にいえり、故に省く。)心不思議は、心理学というものあれど、これは脳とか感覚諸器とかを離れずに研究中ゆえ、物不思議をはなれず。したがって、心ばかりの不思議の学というも今はなし、またはいまだなし。次に事不思議は、数学の一事、精微を究めたり、また今も進行しおれり。・・・」

【Ⅲ】 ^{ごうしれい}神社合祀令と^{かしま}神島

1906 年に明治政府が発した「神社合祀令」に、『自然の破壊は人間の破壊につながるのが原則』と言って熊楠は命がけで反対していく。

神社合祀令とは、日本全国津々浦々に点在する神社の祭神を、その地域の主要な神社に合祀させ、神社の数を減らしその神社林を売却し国の財政にあてるというものであった。



図－1 「南方曼陀羅」

本令により、土着の信仰・習俗が毀損され、また神社林、いわゆる「鎮守の森」が伐採されて固有の生態系が破壊されていくことを憂い、熊楠は翌 1907 年から神社合祀反対運動を起こしていく。

とりわけ、熊楠が大切に思ったのは、田辺湾西方に浮かぶ神島(西牟婁郡新庄町)の自然であり、本州では紀州にのみ産するという神島の彎珠(わんじゅ・ハカマカズラ)の保存、その他隠花植物、シダ類合わせて百八十五種、および熊楠が発見した新種の菌類等々の保護に奔走した。

熊楠たちの熱心な保護運動のお陰で、神島は 1911 年には保安林として保護されることになった。

その後、貴族院議員の徳川頼倫らの努力により、大正に入ってから次第に不合理な神社合祀がなされることはなくなり約 10 年後の大正 9 (1920) 年に、貴族院で「神社合祀無益」と決議され事態は終息した。

神島は、後に昭和天皇が行幸する地となった。結果として 1934 年に史跡名勝天然記念物保護区域として文部省より指定されている。

熊楠はこの運動の際に、「エコロジー(エコロギー)」なる語を初めて紹介すると共に、いわゆるエコロジー活動の先駆者としても高く評価されている。ちなみに、現在は神島への上陸は禁止されている。



写真-2 神島全景

【Ⅲ】 昭和天皇と南方熊楠の相聞歌

① 昭和天皇へのご進講

昭和 4 (1929) 年 6 月 1 日、昭和天皇が 28 歳の時に南紀伊へ行幸されたおり、当時 62 歳の南方熊楠は田辺湾上神島の近くで、お召し艦長門船上にて和歌山県の植物分布、とくに神島の植物生態と南方の専門であった粘菌学についてご進講を行っている。この際、粘菌標本を献上しているが、献上物は桐の箱など最高級のものに納められるのが常識だったが、熊楠はキャラメルのような大きな箱に入れて献上している。

昭和天皇は、皇太子時代から生物学に強い関心を持ち、とりわけ興味を示したのが、海産生物のヒドロ虫と粘菌(変形菌)の分類学的研究であった。

ご進講の翌日、天皇は神島に上陸されて、この島の植生を守った南方に「脱帽遊ばされた」とのことである。

② 昭和天皇と南方熊楠の相聞歌

この時、南方は次のような歌を詠み、友人の贖金をもって神島の浜辺に歌碑を建てた。

(写真-3 歌碑建立記念・昭和 5 年 6 月 1 日)

写真左端の着物姿の人物が熊楠である。

一枝も 心して吹け 沖っ風

わが天皇の ^{すめろぎ}めでまし森ぞ

南方熊楠



写真-3 神島浜辺の歌碑

南方熊楠の没後、1962年2月5日に天皇は再び白浜に行幸された。熊楠と最初に出会って33年後に、御宿舎のホテルの屋上から、田辺湾をのぞまれて詠まれた御製がある。

雨にけふる 神島を見て

紀伊の国の生みし 南方熊楠を思ふ

昭和天皇

本歌は、昭和天皇が民間人を詠んだ最初の歌とのことであり、この歌碑は白浜町の南方熊楠記念館のある番所山に建てられている。(写真-4)

「昭和天皇が神島に上陸された折りに詠んだ熊楠の歌と昭和天皇が白浜に再行幸された時の御製は、まさに33年の時を超えての南方熊楠と昭和天皇の相聞歌である。」と鶴見和子氏が解説している。



写真-4 記念館前の御製碑

【Ⅲ】量子力学100年と熊楠の「五つの不思議」

① 量子力学100年

量子力学(量子論)は、ミクロな世界の現象を取り扱う物理学であり、ドイツの物理学者のヴェルナー・ハイゼンベルク(1901~1976)は、1925年に量子力学に関する歴史的な論文を発表した事が、量子力学のはじまりと言われている。今や量子力学は現在物理学の基盤となっており、量子コンピューターやスマホ等々はこの量子力学なくしては生まれていない。現在の私たちの便利な生活は量子力学に支えられており、昨年の2025年は量子力学が誕生してから100年の節目の年で、国連はこれを記念して2025年を「国際量子科学技術年」に定めている。

量子力学は、従来の物理学(古典物理学)の常識を覆す革命的な理論であるがゆえに、その誕生の裏には多くの物理学者たちの苦悩、そして戦いの物語があると言われている。

ちなみに、ハイゼンベルクは1932年31歳の若さでノーベル物理学賞を受賞している。これまでの常識を覆し且つ極めて難解な最新の「量子力学」を理解しようとする事は、筆者の頭脳では所詮無理と諦める一方で、事実関係だけを「しなやかマインド」で素直に受け入れることが賢明と考えるところである。

② 熊楠が語った「五つの不思議」

先に述べた熊楠の「五つの不思議」を図-2に示す。今は、熊楠が後の高野山管長の土宜法竜宛に「曼荼羅図」と「小生の事の学」を送った頃から約100年が経過している。

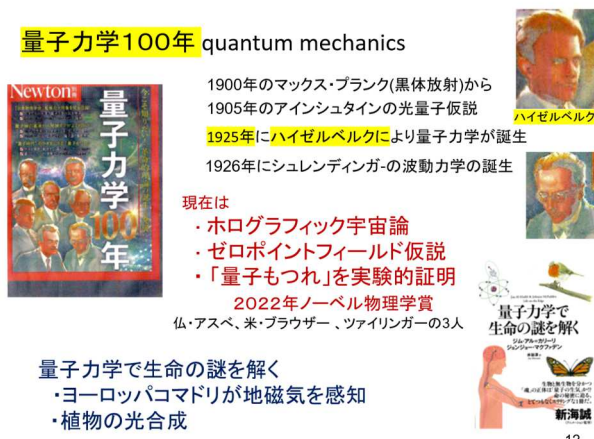


図-1 2025年は量子力学100年

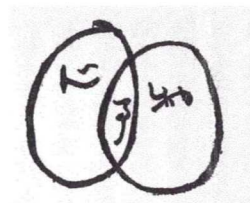
南方熊楠が語った「五つの不思議」とは何か

事不思議(ことのふしぎ)あり	偶然、運命、 数学 、 量子力学
物不思議(もののふしぎ)あり	個物、物質、 生物学 、 物理学
心不思議(こころのふしぎ)あり	意識、感情、記憶、 心理学
理不思議(りのふしぎ)あり	因果関係、自然科学全般
大日如来の不思議あり	大不思議(宇宙の根本原理)

今の学者、ただ箇々の**この心****この物**について論究するばかりなり。小生は何とぞ**心**と**物**とがまじわりて生ずる**事**によりて究め、**心界**と**物界**とはいかにして**相違**に、いかにして**相同じき**ところあるかを知りたいなり。

「小生の事の学」 土宜法竜への往復書簡で

さらに、熊楠は**事**と**理**が交錯し現象が凝縮する交点を『**萃点**』と言っている



熊楠自筆の**心と物と事**
「南方コレクションI」 河出書房 より

図-2 南方熊楠が語った「五つの不思議」

当時の熊楠の智によく現在の学問が追いついたというのが筆者の感想である。現在の細分化された学問分野では、物不思議を対象とするのが物理学(古典物理学)、心不思議を対象とするのは心理学、そして事不思議を対象とするのが量子力学や脳科学とっていいのではないだろうか。

また図中には熊楠直筆の「物」と「心」の交わるところに「事」があることを示しており、事に対する熊楠の鋭い感性を示す非常に興味深い図と考え方である。

③ 「モノ」から「コト」へ

(竹内薫著『物質をめぐる冒険—万有引力からホーキングまで—』より)

東京大学で物理学を専攻したサイエンスライターの竹内薫氏(1960～)は、自著の『物質をめぐる冒険』において次のような興味深い文章を綴っている。以下抜粋。

③-1 「本書の表紙裏の言葉」と「はじめに」より筆者が合成して作成

「あるようでないのがモノ?!」科学の最前線で今、物質の見え方が大きく変わろうとしている。たとえば目の前にあるコップ。この確かな手触りや重さをもつモノを解体していくと、位置も形も特定できない量子が顕現する。科学の進歩で、ミクロの世界から何万光年もの宇宙の涯まで解明されると、モノの本性は、生成消滅の繰り返し、周囲との関係性に還元される抽象的な存在(コト)であることが判明した!

確固たるモノの世界を記述したニュートンから今や物理学者が扱っている物質は、もはや、古き良き時代の物質ではなくなっている。その流れは、どうやら、アインシュタインあたりから始まっている。

モノも時空も消え去ったコト的世界を描く最新科学理論まで物理学と言う「物質」を扱う学問の変遷を通じて、人類の知的進化の奔流を追う、スリリしてングな物理思想の旅。

一言で言い表すならば、それは「モノからコトへ」となるであろう。」

③-2 エピローグ—色即是空の物理学(現代物理学の到達点)より

今、人類の文化を席捲している大きな潮流は「モノからコトへ」と呼ぶことができる。われわれの思想史を語る際、もはや、現代物理学に端を発した革命とその後の展開は、無視することができない。

現代物理学は、もしかしたら、人類の思想の究極の到達点をわれわれに垣間見させてくれているのかもしれない。

私がいつも思い出すのは、誰もが知っている「般若心経」の文句である。

「色即是空、空即是色」

「色」を「モノ」、「空」を「コト」と読み替えてみたまえ。

モノとして物質に代ってコト的な関係性が主役に躍り出た。

なにものも単独では存在できず、すべてはつながっている。

モノはコトに取って代われ、次の瞬間、そのコトはモノとしてあつかわれる。

「色即是空、空即是色」

たしかに、それこそが宇宙の実相なのかもしれない。少なくとも、現代物理学の到達点は、宇宙の本質がコトであることを雄弁に物語っている。

【Ⅲ】南方熊楠の名言

最後に、30 年近く前に初めて出会った時から座右の唱え言としている私の好きな熊楠の名言を紹介する。

宇宙万有無尽なり。ただし人すでに心あり。心ある以上は、心の能うだけの

楽しみと宇宙より取る。宇宙の幾分を化しておのれの心の楽しみとす。

これを智と称するかと思う。

2026. 7. 15

特別上級土木技術者

原 稔 明

【参考図書】

① 鶴見和子：南方熊楠、講談社学術文庫(1981)

② 中沢新一：南方熊楠コレクション I 南方曼荼羅、河出文庫(1991)

『解題 南方マンダラ』

① 原稔明：明治・大正の土木技術者に学ぶ気概と志、サンライズ出版(2023)

第6章『紀州が生みし知の巨人・南方熊楠—土木技術者が学ぶ智の世界—』